

T. E. グトロヴァ 『エリウェリ - イテリメンの伝説 - 』

露訳 K. N. ハロイモヴァ 和訳・解説 小野 智香子

キリル文字に基づいた新しいイテリメン語のアルファベットが創設されたのは、1985年のことであり、1988年からこの新しいアルファベットによるイテリメン語の教科書、辞書、教材が刊行されるようになった。学校教材としての教科書等を除き、イテリメンの作者による、イテリメン語で書かれた最初の出版物は、1994年に出版された K. N. ハロイモヴァによる『クトフの子供たちへ』という、なぞなぞや詩を集めた小冊子であった¹。その翌年の1995年に出版され、イテリメンの作者による、イテリメン語で書かれた2番目の出版物となったのが、今回ご紹介する『エリウェリ - イテリメンの伝説 - 』である。

作者の T. E. グトロヴァは、カムチャツカ西岸にあるコヴラン村出身のイテリメン族の女性(1930年生まれ)で、歌や踊りなどの芸術活動を続け、現在でもイテリメンの歌の歌い手として有名である。彼女は、母親や祖母から聞いた民話、伝説、神話を思い出しながら記録し、語り継いできた。『エリウェリ』はこうした経験の中から、グトロヴァ氏が自身で伝え聞いた話を元にして書かれたものである。

コヴラン村の近くに「エリウェリ」という名の山がある。山というよりは、小高い丘と言った方が近いだろうか。まんまるいお椀をさかさまにしたような形状をしている。本書はこの「エリウェリ山」や、その周辺の地がどのようにしてできたかを語った伝説である。ちなみに、コヴラン村のイテリメン族のアンサンブルも「エリウェリ」という名で活動しており、高い評価を得ている。

本書テキストはイテリメン語とロシア語によって書かれているが、一言一句対応しているわけではない。本稿では K. N. ハロイモヴァによるロシア語逐語訳を参考にしながら、イテリメン語のテキストをなるべく忠実に和訳した(脚注は小野による)。『エリウェリ』の世界を再現できれば幸いである。

¹ K. N. Халоймова, *Детям Кутха, СЭТО-СТ, Петропавловск-Камчатский, 1994.*

T. E. グトロヴァ 『エリウェリ - イテリメンの伝説 - 』 RIO KOT, ペトロパヴロフスク・カムチャツキー、1995.

T. E. Гуторова, *Эльвэль. Ительменская легенда.* РИО КОТ. Петропавловск-Камчатский, 1995.

昔、こんなことがあった。海の近くのある村にウフト²という若い狩人が住んでいた。ウフトは強く、とても機敏で美しかった。

同じその村に、美しいラッチャフ³が住んでいた。彼らは愛し合っていた。彼らは冷たい小川のそばで何度も会っていた。ラッチャフは、ウフトが自分と結婚したがつていることを父に言った。母、父は喜んだ。あのようなすばらしい、勇敢な男が彼らの一人娘を愛している。春になりつつあったある日、ラッチャフは急いで白樺林に向かっていた。ウフトが彼女を待っていた。彼女は解けている春の地面を喜んでいて、恋人に会いたくて仕方なかった。

突然、彼女に対して道が閉ざされた。老いた、意地悪いシャーマン、カナによって。

「ウフトの所へ急いでも無駄だ、美しいラチよ！もうじきおまえは私の妻になるだろう。美しい服、たくさんのおいしい、脂ののった食べ物がおまえの所にあるだろう。私は皆に恐れられている。それゆえ私には与えられる。とても美しい服、たくさん毛皮、魚の干物、フィリアザラシの脂肪、肉が。私の呪いは強い。誰でも私は破壊する。決して良いシャーマンによって魔法を解かれることはない。」

カナは意地悪く口を歪めた。大きく笑っていた。

「はっはっは！おまえの両親にも私は恐れられている。彼らはあえてあんな男に与えることはしないだろう。はっはっは。」

ラッチャフは恐ろしい、悪い人に首を縦に振らなかった。ただ、ガンコウランの実のような目が誇り高く輝いた。小川のそばでウフトを見るとラッチャフは泣いた。彼女は愛する人に、カナが何をしようかを話した。

「恐れるな、ラッチャフよ。私自身がおまえの両親と話し合う。きっと彼らは賛成するよ。私たちはもうすぐ結婚するんだ。私は狩りをする。私たちにはいつもあるだろう、トナカイの毛皮、毛皮の服、山羊の毛皮、熊の毛皮、フィリアザラシ、魚の干物、食べ物が。」

従順な、とても機敏な山のスレチ⁴はいつも狩り場で手伝う。ウフトは老人たちを説得していた。彼にラッチャフを渡すようにと。彼らは言った。

² uxt : イテリメン語で「白樺の森」の意。

³ laccax : イテリメン語で「太陽」の意 (lac : 「太陽」, -cax : 指小辞)

⁴ slac : イテリメン語で「驚」の意。

「おまえはラッチャフと結婚したい。カナに置いていかないならば、カナは私たちに恐ろしい病気を送るか、彼の人々を送り、矢で、槍で、私たちを殺すだろう。」

「老いた、意地悪いカナの所へなんか、決してお嫁に行かない。今すぐ体を海に投げ捨てたい！」
ラッチャフは叫んだ。そして激しく泣いた。

老人たちの心が痛んだ。どうするか。－ 結局、同意した。

住民たちはウフトの結婚式で大いに楽しんだ。ウフトとラッチャフは愛し合って暮らしていた。両親は子供たちの前では喜んで見せているが、心の中では憤然としたカナを恐れている。

もう春になっていた。ウフトは遠く高い山々へ、羊やトナカイを狩りに行く支度をした。

「体を大事にしろ、ラッチャフ。おまえが出産する日が近づいている。私たちに赤ん坊が生まれるだろう。私のために心配するな。次の月が出る頃、私は獲物を持って戻って来る。」

どのくらいの日々が過ぎただろうか。ラッチャフは女の子を産んだ。両親は男の子を期待していた。それゆえ、お産を手伝った祖母は言った。

「ああ、女の子だ…」

赤ん坊はエリウエリと名付けられた。

日々が過ぎていった。ラッチャフはウフトをずっと待っていた。すでに次の月が出ていた。ラッチャフは子に歌った。

「今日は来るよ、おまえの父が。おまえは彼に喜んでもらえるよ。」

突然、夜明けに誰かが激しく叫んだ。母が叫ぶのを聞いて、ラッチャフはびっくりした。

「悪いことが起きている、娘よ。」

母は走り込んで、叫んだ。

「どこからか現われた、悪いカナが。知らない人々が来た、矢を持って…」

カナは後ろからその場に押し入った。

「ラチよ、おまえは私と結婚しなかった。今、私は力で奪い取る。おまえは言うことを聞かなかった。私は、言うことを聞かないおまえの住民たちを皆殺しにしてやる。ウフトのために産んだこの小犬を－」

彼は小さなエリウエリを指した。

「－ 私が呪ってやる。ウフトの生活を悪くしてやる。私は彼の子を生きのまま置いていく。その子はとても悪く、不幸を秘めて育つだろう。悪いことが起こるだろう。この子は悪く、意地悪な者として人々に知られるだろう。」

「何のためにだめにするのか、不幸な赤ん坊を！」

孫を手に取り、老いた女はカナに向かって叫んだ。カナの目は、とても意地悪く光輝いた。

「おい、ミンリヤイ⁵、私の妻を見張っている。今反抗者たちを狩りに出かける。」

カナは自分の仲間に命じた。

ラッチャフは村の方から、叫び声、うめき声、罵りの声を聞いた。カナがいたずらに人々を殺していたのだ。ラッチャフは小さなエリウエリにキスをした。母を強く抱いた。そして静かにささやいた。

「怒らないで、お母さん、エリウエリを守って。ウフトをととても愛しているの。決してカナと結婚しない。」

母にキスした。ラッチャフは扉を突き開け、海へ走って行き、岸から下へ身を投げ捨てた。すぐに波で覆われた…永遠に。ミンリヤイは岸をただ走っているだけだった。カナに怒られ、海に押し込まれた。

十分に獲物を殺し、楽しく歌って、ウフトは村へ戻って来た。遠く前方にスレチが飛んでいた。突然ウフトはそれを見た。なぜスレチが戻って来るのか。

「悪いことが起こっている、友よ！そこで悪いことが起こっている。」

スレチは近づいて叫んだ。

ウフトは走って村へ着いた。とても恐ろしいことが起こったのを、ウフトは見た。殺された友人たちが至る所に倒れている。悪い腕は誰に対しても容赦しなかった。子供たちも、老人たちも。死人たちの中に、ウフトは死にかけている母を見た。彼女は何かを手で覆っていた。ウフトは彼女の方へ跳んでいった。ゆっくりと傍らに座った。

「お母さん、何が起こったのか。どこだ、ラッチャフは？」

「おまえのラッチャフを探すな。」

女は静かに言った。

「彼女はカナの妻として奪われたくなかった。だから体を海に投げ捨てた。彼女はおまえに身を捧げたのだ。私たちの住民たちはカナに殺された。」

何かを手でゆっくりと拾い上げ、ため息をついて再び言った。

「この女の子はエリウエリ、おまえの子だ。彼女はカナに強い呪いをかけられてしまった。私は死にそうだ、息子よ、私は命じる。行け、良い老人クウエズム⁶を見つけるのだ。彼はとても機敏なシャーマンだ。エリウエリの悪い呪いを取り去ることは、彼にしか期待できない。」

母は死んだ。ウフトは強い腕で小さなエリウエリをやさしく抱き上げた。深い悲しみとともに、誰か一人でも生きている者を見つけようと、破壊された村をまわってみたが、無駄であった。深く心のつながった村に火をつけ、小さな女の子を手を、ウフトは歩いた。遠くへ、高い山々の方へ。

年月が過ぎた。エリウエリは成長していた。ウフトは良いシャーマンを見つけた。彼はすでに年

⁵ minłaj : イテリメン語で「ウサギ」の意 (minł : 「ウサギ」, -aj : 指大辞、時に軽蔑の意を伴う)

⁶ kŕezm : イテリメン語で「ハマナス」の意。

をとっていたが、とても強い男だ。ウフトは彼に、何が起こったかを話した。エリウエリを呪いから助けてくれるよう頼んだ。クウェズムはよく考えた。考えて、彼は想像の中で生命に別れを告げていた。ウフトの方を見て、言った。

「悪いカナはとても強い魔法使いだ。彼の呪いを取り去ることは、私に死をもたらす。私はもう老人になった。人々に良いことをするのに慣れた。私は死んでゆく。私の善良なる魔法をおまえが受け取るのだ。約束しろ！」

「約束する」ウフトは言った。

クウェズムは激しく戦った。シャーマンの力でカナの悪い呪いを追い出した。

「良い魔法は私に言う。『カナは死んだ。彼の悪い魂は白樺の木々へ移動した』」

クウェズムは言った。

「イテリメンたちに言い続けろ。もし白樺の木が不幸、悪だったら、これは悪い木、カナの木だ。家々を作ってはいけない。年輪を読んではいけない。おまえの娘エリウエリは、美しく、良く育つだろう。しかし決して忘れてはならぬ。18回の春が訪れるまで、人々に彼女を見せるな。さもないと悪いことがあるだろう。聞いているか？」

「聞いている」ウフトは言った。

クウェズムはウフトにお守りのついたカラウス（毛皮の手下げ）を渡した。

「今私の手を取れ。臍を通じて私の善良なる力がおまえにあらんことを。私は楽に死ぬだろう。おまえは良いシャーマンになるだろう。正しく行け、人々の所へ。」

こうして良いクウェズムは死んだ。良い魔法をクウェズムから受け取った。

ウフトは住む場所へ、子と共に歩いていた。遠い山々へ。ウフトは狩猟に出かける時、エリウエリをスレチと共に置いて行った。エリウエリはスレチによって肉食の獣たちから守られている。そうして成長していた。スレチにたくさんのベリー、キムチガのある所を教えられている。スレチはイテリメン語で話した。とてもエリウエリを愛していた。

ウフトはいつも春にハンチアン⁷村に出かけていた。ウフトは住民に会うと、喜ばれる。

「良いシャーマン、ウフトが来た。秋には小川に魚が、海にファイリアザラシがたくさんいるであろう。病気もなく、飢えないだろう。」

住民たちはウフトの来訪に、いつも大きな祭を行う。

17回の春が過ぎていた。再びウフトは遠い道のりへの支度をしていた。カラウスに美しい毛皮上着、帽子を入れた。

父の帳にエリウエリが入った。悲しそうだった。

「何が悲しいのか、エリウエリ、誰かに怒られたか？」

⁷ xanc'an : イテリメン語で「上流の」の意。

子はウフトに尋ねた。

「お父さん、あなたはいつも春に人々の所へ出かける。私は一人でスレチと共に残る。村へ私を連れて行って。人々を見たい。どのように祝っているか…」

「だめだ！いけない！」

ウフトは子に怒った。

「もう一冬が過ぎるのを待つんだ。次の春が来たら、私たちはハンチアン村へ、祭へ一緒に出かけよう。」

エリウエリは何も言わなかった。ただすぐに激しく泣いた。彼女は怒った。父は決して彼女を叱らなかった。愛する娘が怒って、ウフトの心は痛んでいた。彼はエリウエリに近づいて、言った。

「泣くな、エリウエリ！もし夜に白鳥の羽毛で覆いを編んだら、おまえと一緒に連れていくよ。ただし約束しろ！おまえは誰にも自分の顔を見せてはいけない。」

「はい、お父さん。覆いの中に居続けます。でもなぜ私は私の顔を隠すの？」

「黙っている。このことについては一冬過ぎたらおまえに話す。」

彼は言った。そして森へ行った。娘に彼の目の中の悲しみと痛みを見られないように。彼は彼のラッチャフを思い出した。エリウエリは母にとってもよく似ていた。エリウエリは、まるで17年前の春のラッチャフのように美しい。彼のラッチャフ。

喜んだエリウエリは一晩中覆いを編んでいた。善良なスレチは彼女を手伝った。もう夜明けだ。エリウエリはとても白い覆いを編んだ。早朝に、ウフトはエリウエリと一緒に丸木舟で下流へ向かった。ウフトは娘を見て、心が痛んだ。悪いことが起こるだろう。彼は娘に何も言うことができなかった。とても恐ろしい呪いが彼女の上を飛んでいる。

ハンチアン村へは長い道のりだった。すでに遠くから、ウフトとエリウエリは、とても喜んでる叫び声を聞いた。若者たちが見ている、住民たちに話した。ウフトが来ている。愛すべき良いシャーマンは、とても良い漁師、プラヘン⁸とカウラル⁹に迎えられた。彼らは強くとても機敏で、良く獲物を捕る兄弟だ。彼らの所では、狩猟、漁労で全てが常にうまくいっていた。狩りからたくさんものを持って来た。そしていろいろなものを人々に分け与えていた。彼らはとても仲がよく、いつも互いに助け合っていた。

とてもおいしい食べ物を愛すべき客たちにあげた。とても良い毛皮をウフトの脚に置いた。とにかく皆が良いシャーマンとのすばらしい出会いを欲しがった。

クロマメノキとベニテングダケのジュースを作って、良いシャーマンを参らせた。

良い儀式が過ぎていたその時、シャーマンはとても良い主人たちに、夏の豊かさと、冬の狩りの成功を祈った。ウフトは白くやわらかいトナカイの毛皮の上に寝かされた。十分に食べ、強い飲み

⁸ playen : イテリメン語の川の名前。現在の Xajrjuzovo 川。

⁹ kaβral : イテリメン語の川の名前。現在の Kovran 川。

物を飲み、困難な道で疲れていたウフトは眠った。

良いシャーマンが眠っている土小屋の後ろで楽しい祭が続いていた。若者たちは競争していた。弓で戦ったり槍を投げたりした。暗闇の中、とても暖かい焚火の近くで「ホズリ」¹⁰の音が聞こえた。悲しいイテリメンの歌を歌った。若者たちは悲しむことに飽き、そして楽しい笛の演奏が空へと上った。皆が楽しんでいて、「ヘフメ」という踊りを踊っていた。

エリウェリは顔に覆いをつけて脇に立っていた。彼女は彼女の父と会っていたあの若者たちを見ていた。何か彼女の心の中に、よくわからない嬉しいような感情が起こった。そして父の指図を忘れて、彼女は顔から覆いを投げた。そして彼女も楽しく踊った。とても美しい女の子、シャーマンの娘に驚き、見とれて皆が止まった。

なぜ皆がこのように私を見るの？そして特に、私たちの父と会っていたあの彼ら - 強くてとても機敏な若者たちが？- エリウェリは考えた。そしてはずかしく思った。焚火の近くにいた皆が本当に驚いた。彼らは驚いていた。なぜ女の子は覆いを取らずにいたのか。そしてそれを投げ出した時、エリウェリの美しさはまさに皆をまるで盲目にした。プラヘンとカウラルもまた、突然にとっても嬉しくなった。この熱い愛の炎は彼らの心に住むようになった。

冷たい小風がエリウェリの顔に触れた。そして彼女は父の命令を思い出した。彼女は自分の顔を覆った。そしてゆっくりと遠ざかった。焚火から遠ざかり、森へ行った。彼女は一人で考えたかった。なぜあんなふうに隣にいて気分が良くなったか、なぜ笑いたいか、なぜ歌いたいか。エリウェリは目を閉じて、森の若い白樺の中で回っていた。白樺を抱き、何度もキスした。その時彼女はあの兄弟のことを考えていた。とても美しい彼ら！

突然、彼女は自分の近くに彼らのうちの一人を、向こう側にもう一人を見た。何が起こったのか？彼らは、彼女が祭でとても気に入ったあの彼らとは似ても似つかない。彼らの顔は意地悪く、目は怒りの炎で燃えていた。彼らは互いに近づき、何かを叫んでいた。突然一人がナイフを引き抜いた。するともう一人は相手の方へ飛びかかった。

「何が起こったの？」

エリウェリは強く叫んだ。そして兄弟の中に飛び込んだ。

彼らの間にこのようなことが起こり、彼らは恥ずかしくなった。

「私はプラヘンと呼ばれている。私の弟はカウラルだ。私たちは一度も言い争ったことはない。私たちは今起こったことがとても恥ずかしい。でも私たちは君が好きになってしまったのだ、エリウェリ。我々の一人には妻に、もう一人には妹になってほしい。」

「私はあなたたちが好きです、兄弟よ。」

エリウェリは言った。

¹⁰ xod'ili : イテリメン族の伝統的な歌。

「間もなく、多分永久に、あなたたちの前から去るでしょう。父は私に何かを隠している。何らかの秘密を、そして…」

エリウエリが立っていたその場所で、突然カナの木は曲がった。そして女の子をその枝で閉じ込めた。エリウエリは助けを求めて兄弟のもとに飛び込んだ。彼らは彼女の方へ飛び込み、鋭いナイフでカナの木の枝を切り続ける。

本当にこれはあったのだ - カナの木、悪い木が。カナの心は、憤然とした人々の所でとても喜んでいて。なぜならエリウエリは兄弟に不幸をもたらしたのだから。

「起こった、起こった、私の呪いが！」

意地悪な心は、聞こえないように喜んでいて。なぜならカナの体は叫ばなかったから。こうして勝者は祝っていた。

ウフトはとても良く眠っていた。しかし彼の良い力は夢の中で言った。「エリウエリが約束を破った。そしてシャーマンカナはとても喜んでいて。」

とても長い間座っていた。悲しみに押し黙って。もう夜が明ける、大急ぎで旅支度をした。もう少し残って欲しいと説得された。彼はハンチアン村を後にした。

エリウエリはとにかく父が何かで心配していることを知った。彼女は静かになった。そしてついに道で言った。

「お父さん、私はあなたの禁止を破ってしまった…」

「私は知っていた。」

ウフトは言った。

「何のためにおまえはそんなことをしたのか？」

「話して、お父さん、なぜ私は私の顔を隠し続けるの？だって何も悪いことを人々にしないし、したくないのに。」

ウフトは全てを彼女に話した。

「私は良いシャーマンクウェズムの命令を破った。そして憤然としたカナのその呪いは一生おまえにつきまとう。私は、おまえが人々に不幸と涙をもたらしてほしくなかった。だからおまえは永遠に人々から遠くはなれて暮らし続けなければならない。私の愛と同情はおまえをだめにした。私を許してくれ。」

ウフトは話した。

時が過ぎた。悲しみにウフトは老いた。エリウエリも悲しんでいた。彼らには何も喜べることはなかった。ウフトとエリウエリが苦しむのを見て、スレチでさえ黙った。

ブラヘンとカウラルはエリウエリを好きになって、シャーマンが来るのをずっと待っていた。しかし待ちこがれた春が過ぎても、良いシャーマンは来ない。兄弟は心配した。彼らの愛する者に何

か起こったのか。そして彼らはその時、ウフトの住みかを見つけ出そうと考えた。長い間探し続けた。とても遠く高い山に、シャーマンは住んでいた。ようやく見つけ出した。

シャーマンは親切に兄弟を迎えた。とても心配した。誰ひとり、何年も彼の所へ来なかったのだから。

若者たちの心臓がどきどき打っている。シャーマンは彼らを追い払うだろうか？ 良いシャーマンは彼らを残した。そして夏の住みかへ招待した。エリウエリはプラヘンとカウラルを見てとても喜んだ。食事を作り、彼女は住みかへ入った。食べ物を置いて、黙って去った。兄弟はまるで魅せられたように彼女の後を見ていた。

プラヘンはシャーマンの前でひざまづいた。

「私たちはあなたの子、エリウエリを好きになった。御自分でお考えください、私たちのどちらが彼女の夫になるか、どちらが兄になるか。そのためにあなたの所に来たのです。」

長い間ウフトは黙っていた。のちに言った。

「食べなさい、兄弟よ。旅の疲れを取りなさい。明日私は返事を話そう。」

プラヘンとカウラルは食事をした。シャーマンは彼の家で彼らの寝床を敷いた。彼らは良く眠った。エリウエリは眠っている。ただウフトだけは目を閉じずにいた。一晩中シャーマンは考えていた。この夜は彼の人生で最も長く、最も重かった。

「兄弟を川とたくさんの魚にしよう。人々は彼らから十分な魚を捕って、いつも満足するだろう。」

ウフトの全ての考えをスレチは読んだ。飛び立ち、エリウエリの所へ飛んで行った。エリウエリを起こしている。

「起きろ、起きろエリウエリ、悪いことが起きている！おまえの父は、とても良く迎えた客たちを裏切っている！彼はプラヘンとカウラルを川にするつもりだ！」

エリウエリは髪も結わずに住みかから走って出た。してみると、どこからか二つの川が流れている。一つは広くて静かな川、もう一つは小さくて、ざわざわ音がする川だ。女の子はここそこへ飛び込んだ。一つの川へ、もう一つの川へ。しかしどうすることもできない。

ウフトと共に住んで、まるで予言者のようになったスレチは、彼女の上でゆっくり飛んで、叫んだ。

「はやく決めろエリウエリ！ 静かな広い川はプラヘン、小さくてとてもざわざわしているのはカウラルだ。誰を愛しているか、誰の妻でありたいか、それに触れろ。兄弟の一人をおまえは助けることができる。急げ、もうすぐ彼らは海で一つになる。その時はもう遅い。」

エリウエリは川々の間を走っている。そして彼らの所へ腕を伸ばしている。選ぶことができない。だって彼女は兄弟の二人とも愛しているから。憤然としたカナの呪いが起こったのだ。彼女の愛でさえ、人々に不幸をもたらしている。

ほら、海はもうすぐそこだ。荒々しい、ざわざわと音のする、威嚇的な海。

「エリウエリ、急げ！」スレチの叫び声が聞こえた。

突然、彼女は悲しみのあまり立ち止まった。エリウエリは一人を助けることも、もう一人を殺すこともできない。彼女は、自分が愛した兄弟の間でまるで凍ったようだった。

シャーマンウフトはとても悲しみ、彼の愛した子を、海で永遠に一つになった二つの川の間の山にした。シャーマンはひどく悲しんで、石になったエリウエリの下に横たわり、小さな白樺の森になった。まるで壁のような、高くて白い白樺で覆った。その中には、悪をもたらすカナの木は決して存在しない。良いシャーマンの記念に、人々はこの山をアスラフ・ウフト¹¹と呼んだ。

長い年月が過ぎた。しかし今も川 - 兄弟の間にエリウエリ山が立っている。ワシたちは彼らの上を飛んでいる。この鳥たちは人々へこの出来事を知らせた。昔の反抗的なラッチャフと、どのように父が子を、自分を大事にしなかったかを、それゆえ人々が幸せに暮らしていたということ。とても大きく、強くて賢明なスレチによって、このように鳥たちに語り継がれている。

(K. N. ハロイモヴァ・コリヤーク自治管区教育研究所
おの ちかこ・千葉大学大学院社会文化科学研究科)

¹¹ aslay uxt : イテリメン語で「高い白樺の森」の意。